

『文庫・新書で学問入門、あるいは問学』

(総記、哲学、宗教、歴史、社会科学、自然・生命・医療、技術と社会)

編著 大川 正彦

執筆協力 澤田 ゆかり、高橋 清治、小川 英文、八尾師 誠

2011年8月

編集部注： 執筆者を明記した項以外は、編著者の筆によるもの。文庫・新書の紹介を基本とするが、単行本をあげる場合は★を付している。紹介した図書で東京外国語大学附属図書館に所蔵がある場合は、書名に下線があり、PDF版では同館OPACにリンクしている(所蔵情報は掲載時点のもの)。

【総記】 大学での学びを深めるためには、どうしたらよいのか。

さて、キミたちは大学というところに入ってきた。そもそも、大学って、どういうところなのか、どういうところであるはずなのか、ということ念頭において、学問入門もしくは問学(学を問う)という観点から文庫・新書を中心に紹介したい。ぼくじしんの、大学というところに寄せる「片思い」的な(思い、というものは、いつでも片思い、だけでも)望み、願い、かくあれかし、なども込めて。

● 伊勢田哲司『[哲学思考トレーニング](#)』ちくま新書 2005

いきなり哲学ですか?と言われかねないけれども、大学とは、ほんらい、「哲学思考＝クリティカル・シンキング」、つまりは、物事の理非、是非、その論拠を逐一吟味しながらかんがえる場所のひとつだとおもう。その手引きとして、この本は格段にすぐれている。——いかなる状況におかれたとしても、ひとは、そのような思考の自由を発揮、発現させてよいはずだ、とぼくはおもう。それができない、できにくいとしたら、「何かがおかしい」「何か面白くねえ」とおもってよい。

● 専修大学出版企画委員会編『[改訂版 知のツールボックス——新入生援助\(フレッシュマンお助け\)集](#)』 専修大学出版局 2009

大学での学びをよりいっそう充実したものにするためには、きっと役立つだろうから、companionのひとつになるだろう。——こんな本の外大版が、いつできるのだろうと、淡い期待を抱きつつ本書を推す。ただし、これほどの高水準のものをつくるのには、すくなくとも10年かかる、らしい。キミたちじしんでつくってみたら、いかが?

● 戸田山和久『[論文の教室——レポートから卒論まで](#)』NHKブックス

上記の『知のツールボックス』でも十二分なのだけれど、レポート、論文を書くときには、この戸田山氏の著作をまっさきにオススメする。というより、すぐれた学術論文を舐めるようにして読み込み、読み破ること、そんな学術論文との僥倖なる出会い（あれやこれやの評論やらヒョーロンやらなどには目もくれずに——世にいう学者が書いたり話したりなどすることが、そのまんま学問なのではない！ テレビ、新聞に出てくる学者さんたちの発言は、何ら学問的な裏付けのあるものではない。そんなお寒い事情があるにもかかわらず——、学問も捨てたものではない、というリアリティを体感されんこと）を望む。（次に紹介する書物でも、戸田山氏は本領を発揮されている。）

● 池田 輝政・戸田山 和久・近田 政博・中井 俊樹『[成長するティップス先生](#)』（高等教育シリーズ）玉川大学出版部 2001

「理想的な」教員が——まあ、そんな御仁、なかなか、いないんだけど。すくなくとも、ぼくは出会ったことがない。でも、たぶん、外大にはいる、と信じる。信じたい。——あれやこれやの調教・飼い馴らしをするのではなく、**Critical thinking** を促すひととしてのキョウインが、どんなふうにして授業に臨んでいるかを知るには、本書が、もっとも役に立つ。——しかし、こんな先生をスタンダードにしたら、ぼくなど、なおのこと「不適格教員」の烙印を焼きごてで押されてしまうことだろう。

● 市川伸一『[勉強法が変わる本——心理学からのアドバイス](#)』岩波ジュニア新書

岩波ジュニア新書は、中高生向けのシリーズなのだけれども、あなどるなかれ。（いちいち、その証左を紹介はしない。ごじぶんで調べてみられるがよい。）ノートのとりかた、文章を作成するときの準備作業などについて、「目から鱗」な指摘に満ち満ちている。

同じ著者の『[考えることの科学——推論の認知心理学への招待](#)』中公新書も、物事を筋道立ててかんがえるとはどういうことなのか——ほんとに不思議なことなのだけれど、組織というところでは、なぜだか理非を尽くして論ずるのが罷り通らないことが多い（大学も例外ではない）。意味不明な長広舌で聴き手をほとほと疲れさせ、挙句の果てには恫喝、気づいてみたら消耗の末、「はい、わかりました」と同意してしまう、などは日常茶飯事かも——、などについて示唆に富む。

● 山形浩生『[新教養主義宣言](#)』河出文庫

著者は大学人（大学といふところで何かしてオマンマを喰っているひとたち）ではないのだけれど、そんじょそらの大学人とは格段に違う現代風の「在野の知識人」のひとり。こんにち、「教養」って何か、その「教養」のためにはどのようにパソコンを使っ

たらいいか、の手ほどきをしてきている。この著者はありとあらゆるジャンルの問題作、現代の古典とでもいうべき書物の翻訳をお仕事のかたわら (!) 超人的なスピードでこなしているのだが、同時に、すぐれた〈本読み〉のひとりでもある。——キミたちじしんが、こうしたすぐれた〈本読み〉に出会い、そのひとが「面白い」と言っている本を読みつないでゆくことも、なかなかに楽しいことになるだろう。いわば、〈本読み〉のオツカケだ。ただし、ごじしんが、お仲間繋がり (別名、知のネットワークとか、共同研究とか) だけでしか通じない言葉しか喋れなくなることに對しても用心されたし。そんな奴、ある種の業界には、たくさんいるんだ。キミたちじしんは、そんな奴らのことを蹴飛ばしていい。

☆ 山形浩生『[新教養としてのパソコン入門](#)』アスキー新書

- 谷岡一郎『[「社会調査」のウソ——リサーチ・リテラシーのすすめ](#)』文春新書
新聞やら何やらの「社会調査」「世論調査」のたぐいが、いかに出鱈目 (デタラメ) に満ちているかを、憤懣をこめて告発しつつ、騙されたり、躍らされたりしないには、どうしたらよいかを案内してくれる。この本じたいにも、そうした「リサーチ・リテラシー」をほどこしてみたら、どうなるか。
- 大槻文彦『言海』ちくま学芸文庫 2004 (図書館の所蔵は [単行本](#))
かつて、名だたる小説家たちが、この国初の近代国語辞書を、とてつもない言葉の宝庫として学んだ、という。そんな辞書が文庫化されているのである。——編者・大槻文彦そのひとの生涯を描いた、高田宏『言葉の海へ』(洋泉社新書) (図書館の所蔵は [単行本](#)) もある。
- 最所フミ編『[日英語表現辞典](#)』ちくま学芸文庫 2004
これもまた、ひとりの編者による英語表現関連の辞典。——文庫・新書にかぎらず、手元においておくべき、あるいは図書館のどこに行ったらあるかを知っておくべき辞典、辞書、事典のたぐいはおさえておこう。
- 白川静『[漢字——生い立ちとその背景](#)』岩波新書
最近では類書も数多 (あまた) あるけれども、「独学の精神」(前田英樹。同名タイトルの新書あり) を貫いた、白川静さんの存在を知ってもらおうとおもい、ここに挙げておく。漢字学だけではなく、白川学として独自の問題領域を切り拓いた「知の巨人」。ぼくなどには、諸星大二郎を触発し、孔子についてのコミックを書かした、『孔子伝』(中公文庫) (図書館の所蔵は [単行本](#)) が忘れがたい。その後の研究では、革命家孔子像は覆されてもいるようだけれども。

● 柳父章『[翻訳語成立事情](#)』岩波新書

この国の人文・社会科学だけでなく、学問いっぱんの用語が、明六社に集まったひとびとによって造作されていった経緯（いきさつ）について教えてくれる本。翻訳がはらむズレの問題は、今日においても、いや、今日においてこそ顧みられるべき。この国の「人文・社会科学よ、お前は、すでに死んでいる」状態だけれども、その再生・蘇生（ことばの真の意味でのリハビリ）をはからんとするときには、なにがしか役立つこととおもう。

☆ 齋藤毅『[明治のことば——文明開化と日本語](#)』講談社学術文庫（図書館の所蔵は [単行本](#)）

● 岩波文庫編集部『[岩波文庫解説総目録 1927 - 1996](#)』（上・中・下）

いまでは、単行本で、★『[80年版 岩波文庫解説総目録—1927~2006](#)』も出ている。そればかりか、★『[新潮文庫全作品目録 1914~2000](#)』や『[中公文庫解説総目録 1973~2006](#)』も出ている。様々の本を紹介する（だけではなく、当該の本じたいが作られた歴史的背景などについての洞察もふくめた思想史の書でもある）、日本近現代民衆史家である鹿野政直『[岩波新書の歴史一付・総目録 1938~2006](#)』（岩波新書）は、とても示唆に富む。また、横道ながら、同氏の筆による、岩波ジュニア新書に収められた、『[日本の現代——日本の歴史 9](#)』、『[近代国家を構想した思想家たち](#)』、『[近代社会と格闘した思想家たち](#)』、そして岩波文庫『[近代日本思想案内](#)』も、岩波新書『[近代日本の民間学](#)』、『[日本の近代思想](#)』もオススメする。さらには、★『[鹿野政直思想史論集](#)』（全七巻、岩波出版社）にもいざなわれてゆこう。

● 鎌仲ひとみ・金聖雄・海南友子『[ドキュメンタリーの力](#)』寺子屋新書、子供の未来社

学問の諸分野には属さないけれども、様々の問題を発信し受信するメディアとしてのドキュメンタリーの力を言挙げする、ドキュメンタリー作家たちの発言。キミたちのなかにも、ドキュメンタリーをつくろうとするひとたちが出てきてもおかしくはない、とおもうので、あえて紹介する。著者三人の作品については調べてみてほしい。著者三人がオススメするドキュメンタリーも、とても啓発に富む。

● 竹中芳『[決定版 ルポライター事始](#)』ちくま文庫

この世界からの受信をキミたちじしんがどのように発信し返すかは、なにもガクジュツロンブンにかぎられるわけではない。そんなことを食いぶちに稼いでいるのは幸せに浸りきった（？）ごく少数にすぎない。この、外大を「中退」した著者が、その折々に（武闘ではなく）文闘してきた問題群は、いまもって何の「解決」もされていない。あらためて、著者の鋭敏な問題感覚にオッ魂消る。著者のもろもろの作品群については、

調べてみてほしい。入手困難かもしれないけれど、文庫化されているものもある。

【哲学】知を愛するとはどういうことか。

哲学といえば、「デカンショ」（デカルト、カント、ショウペンハウエル）というのは、どこか、おかしいような気がする。（若い衆は、こんな物言いを知らないだろう、かつて、「戦前」の旧制高校で言い古されたと聞く。）すくなくとも、「哲学史」を覚え込むことが、哲学だとおもっているのなら、それは、決定的に間違っている。クリティカル・シンキングこそが、哲学の生命（いのち）——だから、その意味での哲学は、あらゆる学問の根っこに位置するはずだ。

そんなおもいから、日本語で哲学してきたひとたち、哲学するひとたちの諸作品に焦点をあてて紹介しよう。——このあたりの事情については、次の一書をまっさきに挙げる。

● 熊野純彦編『[日本哲学小史——近代100年の20編](#)』中公新書

日本語で哲学してきたひとたちの営みへの、すぐれた案内。第一部は、「京都学派」を中心にした「近代日本哲学の展望」。第二部は、五つの問題群——「ことばへの視線」「身体性と共同性」「具体性の思考へ」「社会性の構造へ」「哲学史への視点」——を中心にした「近代日本哲学」の名著の案内。——「京都学派」、つまりは京都帝国大学およびその周辺がかたちづくった、いわば「大きな哲学」を中心にしないうで、ごくふつうの縁なき衆生が積み重ねてきた「小さな哲学」（チイ哲、と呼ぼう）からみたとき、どんな展望が語りなおされるのか、そんな問いも浮かぶ。

● 大森荘藏『[知の構築とその呪縛](#)』ちくま学芸文庫

大森荘藏なかりせば、20世紀後半の日本哲学（日本語による哲学）は今日のようにしてありえたのか、どうか。いまは亡き『朝日ジャーナル』に連載された文章が纏められた★『[流れとよどみ](#)』（産業図書）は不朽の名著。（一時期は、「誤読」のうえで、「現代文」の大学入試によく使われた。詳しくは、大森哲学との格闘から自らの哲学思考を紡いできた野矢茂樹、永井均、中島義道、そして大森ごじしんの文章を扱った入不二基義『[哲学の誤読——入試現代文で哲学する！](#)』ちくま新書、を参照のこと。）

● 熊野純彦編『[廣松渉哲学論集](#)』平凡社ライブラリー

廣松渉の哲学の営みを十二分に摂取してきた編者による、廣松哲学のエッセンスを凝縮して編まれた論文集。このほか：

☆ 廣松渉『[世界の共同主観的存在構造](#)』講談社学術文庫

☆ 廣松渉『もの・こと・ことば』ちくま学芸文庫 2007（図書館の所蔵は[単行本](#)）

などがある。大森と同様、「言語」という現象こそ 20 世紀の哲学の最重要問題であり、新たな思考をはじめめる端緒と見切った著者の独自の哲学的思考が展開されている。マルクス主義哲学者・思想史家としての廣松の仕事も文庫や新書で読める。探してみたい。

● 坂部恵『[かたり——物語の文法](#)』ちくま学芸文庫 2008

文化人類学者・川田順造との（とりわけ同氏の『[聲](#)』ちくま学芸文庫（図書館の所蔵は [単行本](#)）、に顕著にみられる）知的交流もあった。ヨーロッパ哲学のみならず、古今東西の文学（もちろん、日本の古典文学）にも造詣の深い、20 世紀において日本語で哲学することを徹底的に追究した哲学者のひとり。この『かたり』は、もともと、弘文堂の思想選書におさめられていた（1990 年）。この叢書には廣松渉『[表情](#)』も収められていたが、西田幾太郎の哲学を思索の糧にしてきた精神科医・木村敏の『[あいだ](#)』もあった。この『あいだ』は、木村の他の著作と並べて、ちくま学芸文庫に収録されている。

坂部の著作でいうと、熊野純彦による解説が付されて版を新たにした、★『[新版 仮面の解釈学](#)』（東京大学出版会）も重要。

【宗教】なぜ、ひとは祈り信ずるのか、祈り信ずるとは何をしていることなのか。

宗教についても、そのほかについても、なんせ、ド素人なので、何も言えた義理ではないのだけれども、ぼくじしんがいざなわれて、「なんで、学生時代に出会えなかったのか？」——出会っていたとしても、全然読めていなかったとおもうけれども——と、地団駄ふんだ書物を挙げておく。

● 親鸞『[歎異抄](#)』阿満利磨訳、ちくま学芸文庫

ここでは、『[日本人はなぜ無宗教なのか](#)』ちくま新書 1996、などの文庫・新書も多数出されているかたが訳された版を挙げておく。

訳者は、柳田國男（やなぎた・くにお）、折口信夫（おりぐち・しのぶ）、五来重（ごらい・じゅう）、高取正男（たかとり・まさお）などのお仕事、いっばんに民俗学といわれる仕事——文庫・新書でも手にすることができるものもあるので調べてほしい——をたっぷりと吸収しつつ、一般向けに、しかも語の本来の意味でradicalに「宗教」について語られている。

☆『[宗教の深層——聖なるもの](#)』

☆『[法然の衝撃——日本仏教のラディカル](#)』

☆『[親鸞——普遍への道](#)』（いずれも、ちくま学芸文庫）

は、なによりも本文を再読、三読してほしい。Engaged Buddhism (社会変革を志向する仏教) についての著書もある。

● 関根正雄訳『[旧約聖書 創世記](#)』『[出エジプト記](#)』『[ヨブ記](#)』岩波文庫

旧約聖書学の碩学の手による翻訳。いっばんには、新共同訳と呼ばれているものが参照される。——聖書と呼ばれることばの集積が日本語に「翻訳」されるにあたって、どのような経緯をへてきたかを調べてみるのも、面白いかも。むろん、キミたちじしんの「専攻語」が使われている地域で、どのような歴史があったのかを調べてみるのも、面白いかもしれない。外大なら、そんな試みがあってもよいのに、なぜ、いままで行なわれてきていない(ようにみえる)のか。

☆新約学の「逆説的反抗者」——その著書★『[イエスという男——逆説的反抗者](#)』から借用——田川建三による、新約聖書の翻訳も(文庫ではないけれども)刊行されつつある。同氏の著作のいくつかは(場合によっては加筆修正されたうえで)、洋泉社新書に収められている。

● 土井健司『[キリスト教を問いなおす](#)』ちくま新書 2003

ぼくじしんは、著者のお仕事をすべて読んできたわけではないけれども、★小松美彦『[対論 人は死んではならない](#)』(春秋社、2002年)での小松との対論で、その存在を知った。小松じしんも生命倫理批判あるいはメタ・バイオエシックスを事としてもいるが、土井もまたキリスト者・神学者として、この領域への積極的発言も行なっている。上掲書は、キリスト教の歴史にかんする授業での様々の異論(「なんのくんのいって、キリスト教は、たくさんのひとたちを殺してきたべえ? あんた、それ、どう総括すんの? んあ?」的な問いかけ、など)を踏まえたうえでのライブ感にあふれ魂魄みなぎる書物。

● 山形孝夫『[聖書の起源](#)』ちくま学芸文庫

様々の神々と競合しつつ、「治癒神イエス」がどのようにして「誕生」したか、を描く書物。救いとは治癒なり、というメッセージは、じつに(両義的な意味で)今日的でもある、かもしれない。

● 井筒俊彦訳『[ユーラン](#)』(上・中・下)岩波文庫

訳者は、東洋哲学の碩学として名高い。文庫でも、いくつもの著作を読むことができる。——その評価は、ど素人なので、不可能。この訳者の〈人と思想〉については、若松英輔『[井筒俊彦——叡智の哲学](#)』(慶應義塾大学出版会、2011年)がすぐれた道案内。

【歴史】 現在（いま）を深く生きるには、どうしたらよいのか？

そもそも「歴史」って何なのだろう？ 何か出来事、「偉人＝お偉いさん」（たとえば、昨今の流行りでいえば、「明治の偉人」とか。そのほとんどはテロリストだったけれど）の「業績」などを「暗記」することが、「歴史を学ぶ」ってことなのかどうか。昨今だと、ビッグな政治家へのインタビューをおこなったものがオーラル・ヒストリーとして流通している。でも、そんなものは、捨ててしまえばいい、忘れてしまえばいい、と、ぼくはおもう。——歴史ではなく、この国で日本語によって、歴史家たちが歴史学という営みで何を賭けようとしていたのか、そのことを少しは齧っておくことも必要だとおもう。

ある元総理大臣は「戦後政治の総決算」をうたって、いろんなことの終わりの始まりをつくってきたとおもうけれど、そもそも、「戦後」って何よ？ ということは問い直されてよい。そんなこと——地域によっては、ひとによっては日々否応なく付き合わされているのだろう問い。あるいは、そのひとたちの生きざま、死にざま、もしくは骨が右の問いそのものになっているようなありかた——をかんがえる機縁にもなるだろう書物も、「問学」として挙げる。

- 和田春樹『[これだけは知っておきたい 日本と朝鮮の一〇〇年史](#)』平凡社新書 2010
日露戦争と日本による韓国併合から説き起こし、今日に至る百年の主要な歴史的問題を論じたもの、論拠とされた史料のレベルも高く、じっくりと取り組むに値する好著。
【高橋清治】
- 武田泰淳『司馬遷——史記の世界』講談社文芸文庫（図書館の所蔵は [単行本](#)）
過去は未来に伝わって初めて「歴史」になる。このため歴史書には、時間に訴える力が備わっている。その力の代価を、記録者たちはしばしば己の血肉で支払ってきた。本書に登場する司馬遷は、その長い名簿の一人である。
武帝の怒りを買ったことで、彼は身体の一部を失い恥辱にみちた人生を送ることになったが、屈辱に耐えて『史記』を著し、一筋縄ではいかない人間の世界を今に伝えた。武田泰淳が日中戦争中の1943年に本書を刊行したことを念頭において読めば、当時の「歴史」の意味が、司馬遷の物語と二重写しになって浮かびあがるはずだ。【澤田ゆかり】
- 竹内好『魯迅』講談社文芸文庫（図書館の所蔵は [単行本](#)）
魯迅の文章と人生を題材にした奔放な随筆。歴史資料を駆使した研究ではないため、伝聞や推測にもとづいた断定が目につく。そのため独りよがりの印象を受けて、抵抗を覚える人もいるかもしれない。しかし本書の面白さは、若き日の筆者が想像の力で魯迅

の頭のなかに入っていく、魯迅の言葉に仮託して己の胸中を吐露する勢いにある。竹内好は、複雑な心の揺れを表すのに、平易な言葉をリズムカルに組み合わせることで、巧みに説得力のあるイメージを組み立てていく。名言集を読むように、竹内の名調子を鑑賞するのが吉。【澤田ゆかり】

☆ 河上徹太郎ほか『[近代の超克](#)』富山房百科文庫

☆ 竹内好『日本とアジア』（ちくま学芸文庫）筑摩書房 1993（図書館の所蔵は [単行本](#)）

● 鶴見良行『ナマコの眼』（ちくま学芸文庫）1993（図書館の所蔵は [単行本](#)）

鶴見先生には、実際にお会いする前に、★『[アジアはなぜ貧しいのか](#)』や『[バナナと日本人](#)』（岩波新書）などの著作を読んでいた。その頃、東南アジア考古学の邦文文献はほとんどなく、フィリピンで考古学をめざそうとする学生だったわたしは、「東南アジア本」なら分野に関係なく、渉猟していた。

はじめて聞いた先生の講演は、「ナマコ」の話であった。ナマコがいかに東南アジアの諸地域を、海を通じて結び、生き活きとした歴史を描いてきたか、そして 20 世紀以降に人為的に作られた国境が、闊達とした交流の道を阻止してきたかが主題であった。衝撃であった。先生のピンクのセーター姿以上に感激した。「ナマコの歴史を掘り起こしている人もいるんだ」。

驚いている間に、その後、早稲田の法学部図書館で、鶴見先生をお見かけしたので、「先生！」と呼びかけた。すると先生はいきなり、「ぼくは先生じゃない、著述業だ」とおっしゃった。

それでもお話しする機会を作っていただき、「先生は『アジアはなぜ貧しいのか』などで、暗いイメージのフィリピンを描いてこられました、一転、「ナマコ」では、明るい、とても広がりのある歴史を提示されました。その違いはなぜですか。「マルクス主義的に描くと暗くなるので、なんとかしたいと思っていたんだ。そこで海の歴史を見てみると、これまで知っている歴史とは異なる一面が出てくるんだよ」。

おもしろい。そしてわたしも、鶴見先生の魅力に強烈に引き込まれてしまったのである。

遅れて★『[マラッカ物語](#)』や★『[マンダラ島の沼地で](#)』にも接した。90 年にはナマコの集大成★『[ナマコの眼](#)』を上梓した。惜しくも 94 年に逝去されたが、鶴見先生はアジアを歩き、自分の感性に従って、これまでの説明に飽き足らない研究者魂をもって、新たな東南アジア像を描いたのであった。【小川英文】

☆ 二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』平凡社ライブラリー（図書館の所蔵は [単行本](#)）

☆ 良知力『[向う岸からの世界史](#)』ちくま学芸文庫

☆ 良知力『青きドナウの乱痴気』平凡社ライブラリー（図書館の所蔵は [単行本](#)）

- ☆ 網野善彦『[\[増補\] 無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和](#)』平凡社ライブラリー
(図書館の所蔵は [単行本](#))
- ☆ 勝俣鎮夫『[一揆](#)』岩波新書、笠松宏至『[徳政令](#)』岩波新書、石井進『中世武士団』小学館[文庫判] (図書館の所蔵は [単行本](#))、佐藤進一『[南北朝の動乱](#)』中公文庫
- ☆ 宮本常一『[忘れられた日本人](#)』岩波文庫、『家郷の訓』岩波文庫 (図書館の所蔵は [単行本](#))
- ☆ 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』ちくま文庫 (図書館の所蔵は [単行本](#))、『中世賤民の宇宙——ヨーロッパ原点への旅』ちくま学芸文庫 (図書館の所蔵は [単行本](#))
- ☆ 阿部謹也『[刑吏の社会史——中世ヨーロッパの庶民生活](#)』中公新書
- ☆ 川田順造『[口頭伝承論](#)』(上・下) 平凡社ライブラリー
- ☆ 川田順造『[無文字社会の歴史](#)』岩波現代文庫
- ☆ 安丸良夫『[日本の近代化と民衆思想](#)』平凡社ライブラリー
- ☆ 安丸良夫『[神々の明治維新](#)』岩波新書
- ★ 安丸良夫・磯前順一編『[安丸思想史への対論——文明化・民衆・両義性](#)』ぺりかん社 2010
- ☆ 色川大吉『[定本歴史の方法](#)』MC新書、洋泉社
- ☆ 岡崎勝世『[聖書vs.世界史——キリスト教的歴史観とは何か](#)』講談社現代新書
- ☆ 佐藤正幸『[世界史における時間](#)』世界史リブレット、山川出版社
- ☆ 石原保徳『世界史への道——ヨーロッパ的世界史像再考』(前篇・後篇) 丸善ライブラリー
- ☆ 宮本正興・松田素二編『[新書アフリカ史](#)』講談社現代新書
- ☆ 川田文子『赤瓦の家——朝鮮から来た従軍慰安婦』ちくま文庫
- ☆ 杉原達『[中国人強制連行](#)』岩波新書
- ☆ 内海愛子・上杉聰・福留範昭『[遺骨の戦後——朝鮮人強制動員と日本](#)』岩波ブックレット
- ☆ 中野好夫・新崎盛暉『沖縄問題二十年』岩波新書、『沖縄・70 年前後』岩波新書、『[沖縄戦後史](#)』岩波新書
- ☆ 萱野茂『[アイヌの碑](#)』朝日文庫
- ☆ 知里幸恵編訳『[アイヌ神謡集](#)』岩波文庫
- ☆ 新谷行『[アイヌ民族抵抗史](#)』三一新書
- ☆ 黒田日出男『[\[増補\]姿としぐさの中世史——絵図と絵巻の風景から](#)』平凡社ライブラリー
- ☆ E.パノフスキー『イコロジー研究』(上・下) 浅野徹・塚田孝雄訳、ちくま学芸文庫
(図書館の所蔵は [単行本](#))

【社会科学】 冷静な頭と熱いハートで世界のしくみ・しかけを見抜くには？

ぼくじしんは、この国であれやこれや講じられている、あるいは書物として出されてい

る「社会科学」のほとんどは spam mail と同様、と思ひ込みもしているのだけれども、それでもなおかつ、てめえのレゾン・デートル（存在理由）にもかかわるから、しかたなしに、「社会科学って何？」ということをかんがえざるをえない。新聞の一面記事——地域によって、国によって、一面記事がどれほど違うかをおもってもみよ！——について、あれやこれやを評論すること（だけ）がシャカイカガクだとは信じていない。となると、そもそも、学問って何なのよ？ということにもなるが、「問学（学そのものを問いかえすこと）なくして、学問はありえない、あつてはならない」ということを、ぼくとしては、小さな声で言うほかない。

- ☆ 内田義彦『[読書と社会科学](#)』岩波新書
- ☆ 内田義彦『[社会認識の歩み](#)』岩波新書、『[資本論の世界](#)』岩波新書、★『[経済学の生誕](#)』未来社
- ☆ 花崎皋平『[生きる場の哲学](#)』岩波新書、『[アイデンティティーと共生の哲学](#)』平凡社ライブラリー
- ☆ 大庭健『[いま、働くということ](#)』ちくま新書 2008
- ☆ ポール・ラファルグ『[怠ける権利](#)』田淵晋也訳、平凡社ライブラリー
- ☆ 石原吉郎『[石原吉郎詩文集](#)』講談社文芸文庫、『[望郷と海](#)』ちくま文庫（図書館の所蔵は[単行本](#)）
- ☆ 内村剛介『[生き急ぐ——スターリン獄の日本人](#)』講談社文芸文庫（図書館の所蔵は[三省堂新書](#) 1967）
- ★ フランクル『[夜と霧](#)』霜山徳爾訳、みすず書房
- ★ プリモ・レーヴィ『[アウシュヴィッツは終わらない——あるイタリア人生存者の考察](#)』竹山博英訳、朝日新聞社
- ★ 篠田浩一郎『[閉ざされた時空——ナチ強制収容所の文学](#)』白水社
- ★ ハナ・アーレント『[全体主義の起原 3 全体主義](#)』大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房
- ☆ 藤田省三『[精神史的考察](#)』平凡社ライブラリー
- ☆ 市村弘正『[小さなものの諸形態 精神史覚え書 増補](#)』平凡社ライブラリー
- ☆ 埴谷雄高『[埴谷雄高政治論集——埴谷雄高評論選書 1](#)』講談社文芸文庫
- ☆ 埴谷雄高『[埴谷雄高思想論集——埴谷雄高評論選書 2](#)』『[埴谷雄高文学論集——埴谷雄高評論選書 3](#)』講談社文芸文庫
- ☆ 丸山眞男『[忠誠と反逆——転形期日本の精神史的位相](#)』ちくま学芸文庫
- ☆ 堀米庸三『[正統と異端——ヨーロッパ精神の底流](#)』中公新書
- ☆ 鶴見俊輔・中川六平編『[天皇百話](#)』（上の巻・下の巻）ちくま文庫
- ☆ 渡辺清『[砕かれた神——ある復員兵の手記](#)』岩波現代文庫（図書館の所蔵は[単行本](#)）
- ☆ ソースティン・ヴェブレン『[有閑階級の理論——制度の進化に関する経済学的研究](#)』高

- 哲男訳 ちくま学芸文庫 1998
- ☆ カール・ポランニー『経済の文明史』玉野井芳郎ほか訳 ちくま学芸文庫 2003 (図書館の所蔵は [単行本](#))
 - ☆ マルセル・モース『[贈与論](#)』吉田禎吾・江川純一訳、ちくま学芸文庫
 - ☆ アリストテレス『世界の名著 8 アリストテレス』中公バックス (図書館の所蔵は [単行本](#))
 - ☆ 松下圭一『[市民自治の憲法理論](#)』岩波新書
 - ☆ 杉田敦『[デモクラシーの論じ方——論争の政治](#)』ちくま新書 2001
 - ☆ 井上ひさし『[吉里吉里人](#)』(上・中・下) 新潮文庫
 - ☆ A.ド・トクヴィル『[旧体制と大革命](#)』小山勉訳、ちくま学芸文庫 1998
 - ☆ 伊藤博文『[憲法義解](#)』宮沢俊義校注、岩波文庫
 - ☆ 穂積陳重『[法窓夜話](#)』(上・下) 岩波文庫、『[復讐と法律](#)』岩波文庫
 - ☆ 中田薫『[徳川時代の文学に見えたる私法](#)』岩波文庫
 - ☆ 田中宏『[在日外国人 新版——法の壁、心の溝](#)』岩波新書
 - ☆ 井上光晴『地の群れ』河出文庫 (図書館の所蔵は [Kawade paperbacks版](#))
 - ☆ 津村喬『われらの内なる差別——日本文化大革命の戦略問題』三一新書
 - ☆ カラカサン——移住女性のためのエンパワメントセンター反差別国際運動日本委員会 (IMDR-JC) 編『[移住女性が切り拓くエンパワメントの道——DVを受けたフィリピン女性が語る](#)』(IMDR-JC BOOKLET 11) 発行=反差別国際運動日本委員会 (IMDR-JC)
 - ☆ 高史明『[闇を喰む I 海の墓](#)』『[闇を喰む II 焦土](#)』角川文庫
 - ☆ クラウゼヴィッツ『戦争論』(上・下) 清水多吉訳、中公文庫 (図書館の所蔵は [単行本](#))
 - ☆ カール・シュミット『[パルチザンの理論——政治的なものの概念についての中間所見](#)』新田邦夫訳、ちくま学芸文庫 1995
 - ☆ 井上俊夫『[初めて人を殺す——老日本兵の戦争論](#)』岩波現代文庫
 - ☆ デーヴ・グロスマン『[戦争における「人殺し」の心理学](#)』安原和見訳、ちくま学芸文庫
 - ☆ 森崎和江『第三の性』三一新書 (のちに、河出文庫)、『[からゆきさん](#)』朝日文庫 (図書館の所蔵は [単行本](#))
 - ☆ 田中美津『いのちの女たちへ』河出文庫 (図書館の所蔵は [単行本](#))
 - ☆ ティモシー・ベイネケ『[レイプ・男からの発言](#)』鈴木晶・幾島幸子訳、ちくま文庫

● J.P.サルトル『[ユダヤ人](#)』安藤信也訳、岩波新書

本書の中でサルトルが主張するユダヤ人とは、至って単純である。つまり、「他の人々がユダヤ人と考えている人間がユダヤ人」であり、「反ユダヤ主義者がユダヤ人を作る」ということである。

イベリア半島における数百年にわたる異端審問の過程で醸成されてきた、「ユダヤ人のユダヤ人性は永遠に消え去ることはない」といった見方は、ユダヤ人を差別の袋小路

に放り込むこととなったが、サルトルのユダヤ人論は、そうした忌まわしい本質主義的ユダヤ人認識に対する果敢な挑戦といえよう。【八尾師 誠】

【自然、生命、医療】地球で生きるものたちの可能性と限界は？

- レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹築一訳、新潮文庫、1974（図書館の所蔵は [単行本](#)）

環境汚染の古典的ノンフィクション。著者は豊富な実例と感情を絡めた表現力を武器に、化学薬品の危険性について執拗に警鐘を鳴らしている。1962年の著作なので、今の時点から科学的知識の面から錯誤を指摘するのは簡単（したがって、解説文は必読）だが、あくまで安心安全を追求する姿勢からは時代を超えて学ぶべきものが多い。【澤田 ゆかり】

- ☆ 石牟礼道子『[苦海浄土——わが水俣病](#)』講談社文庫
- ☆ 原田正純『[水俣病](#)』岩波新書
- ☆ 栗原彬編『[証言 水俣病](#)』岩波新書
- ☆ 小松美彦『[脳死・臓器移植の本当の話](#)』PHP新書
- ☆ 香川知晶『[命は誰のものか](#)』ディスカヴァー携書、ディスカヴァー・トゥエンティワン
- ☆ 小川鼎三『[医学の歴史](#)』中公新書
- ☆ 米本昌平・松原洋子・棚島次郎・市野川容孝『[優生学と人間社会——生命科学の世紀はどこへ向かうのか](#)』講談社現代新書
- ☆ ウィリアム・H.マクニール『[疫病と世界史](#)』（上・下）佐々木昭夫訳、中公文庫
- ☆ ロバート・F・マーフィー『[ボディ・サイレント](#)』辻信一訳、平凡社ライブラリー（図書館の所蔵は [単行本](#)）

【技術と社会】わたしたちを取り巻き貫く科学技術・産業は、どうなっているのか？

- 宇沢弘文『[自動車の社会的費用](#)』岩波新書
市民のシビル・ミニマムを確保する立場から、自動車の社会的費用を具体的に算出し、望ましい都市交通のありかたを提示した。著者は近代経済学に対して反省的な位置にたち、『[近代経済学の再検討——批判的展望](#)』『[社会的共通資本](#)』『[「成田」とは何か——戦後日本の悲劇](#)』などの新書も出している。
- 松本仁一（2008）『[カラシニコフ](#)』1 朝日文庫（図書館の所蔵は [単行本](#)）

第2次世界大戦のさなか、旧ソ連の技師ミハイル・カラシニコフは、先輩たちの「水も漏らさぬ」精密な設計を放棄し、あえて部品の隙間が大きく空いたスカスカの銃を開発した。その結果、変形した弾丸でも発射でき、大きな衝撃にも故障することなく、手入れが簡単で素人にも扱いやすい「優秀な武器」が誕生した。これこそが現在、発展途上国の紛争で頻繁に使われる自動小銃 AK47—通称「カラシニコフ」である。新聞社のアフリカ特派員だった著者は、わずかな数の AK47 によって「国家」が簡単にひっくり返る現実を目撃し、武力とは何かを考えはじめる。女性や少年の手に握られた AK47 を糸口に、日常化した戦場の舞台裏を淡々と描き出したルポルタージュの力作。

【澤田ゆかり】

- ☆ 富山和子『[水と緑と土——伝統を捨てた社会の行方](#)』（中公新書）中央公論社
- ☆ 高木仁三郎『[市民科学者として生きる](#)』岩波新書
- ☆ 辻信一『[スロー・イズ・ビューティフル 遅さとしての文化](#)』（平凡社ライブラリー）平凡社
- ☆ イリイチ『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う』玉野井芳郎・栗原彬訳、岩波現代文庫（図書館の所蔵は [単行本](#)）